



建築の歴史

丘の上に建つヴィラ・ロトンダはゲーテや英国建築家の目にとまり、そこから欧州全体にパラディオイズムが広がる



旧市街の町並

ラインの宝石＝シュタム・アム・ラインは円形の小さな村。16～18世紀に描かれた壁画の家並みが街を囲んでいます



現代建築&再開発

リヨンの再開発地区にはドキッとさせる建築が並んでいます。一方で旧市街は古いままの魅力を残しながらリノベが...



環境⇄建築

スイスの風景は別格の美しさ。ここでは風景を借景に建築をつくれればよい。でも建築も風景を引き立たせる

ITALY SWISS FRANCE

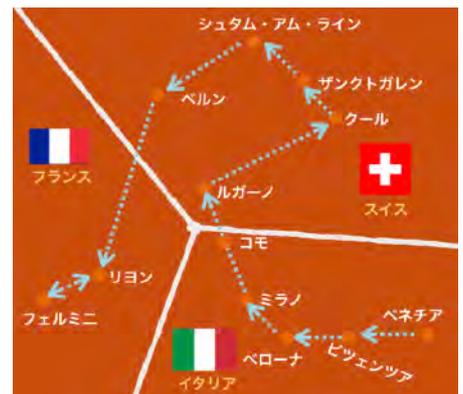
南雄三ツアー2018

パラディオ, スカルパ, ズントー, コルヴィジェ



2018年の南雄三ツアーはバスで欧州の建築と村をスラローム。建築デザインの原点に戻るべく、まずは建築四書をしたためた16世紀の巨匠パラディオを訪ねることにしました。となればスタートはもちろんヴェニス。そこにはカルロ・スカルパも居るじゃないか...というわけでピツエンツァ、ベローナでロトンダ、バシリカ、カステル・ベッキオ美術館を巡ることに。で、その先はどうする?...ミラノで現代建築をみたら次はスイスでピーター・ズントー。そこまでいけばちょいと北上してザンクトガレンとシュタム・アム・ラインで絶品の古い町並みを。そこからベルン経由でリヨンに降りれば、コルヴィジェ最後の作品となったフェルミニの街づくりとラトゥーレット修道院が観れる...ということで、今年の南ツアーも超強行軍でしたが、連日の快晴に救われて快適な秋の視察に...

バスで近場の建築を結びながらの計画立案は、欧州全体を知り尽くした目が必要で、そこにブランドを掛けてつくった企画でした。でも、2日づつ3つの国を巡りましたが、それぞれ、野山の風景も、街の雰囲気も、言葉も、物価も、料理も違って、その「変化」の面白さは想像外の面白さでした。ミラノでは木の茂る集合住宅と現代建築が爆発した再開発地区を観た後に、古典のドゥオーモとガラリアをみて新と旧を実感。丘の上にみせるためのヴィラをつくったパラディオと、ディテールが半端じゃないのに全体の中に溶かしていくスカルパ。風景に建築を溶け込ませながら、建築が風景を引き立てることを追求するズントー。リヨンの旧市街はリノベで継承、その先で新建築を躍らせた再開発があったり...「対比」とはそれぞれを活かすことと知りました。



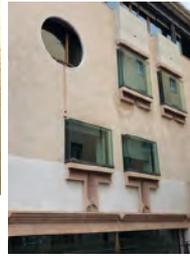
アンドレア・パラディオ



欧州全体にパラディオイズムを萌芽させたロトンドガは今でもその威厳を放ってピツェンツアの丘の上にある

石工だったパラディオの出世作パシリカ。この窓が後にパラディアンウィンドウと呼ばれることになった。

カルロ・スカルパ



オリベティショールーム

クエリーニ・スタンバリア美術館

カステル・ベッキオ美術館

ヴェローナ市民銀行

スカルパの作品は研ぎ澄まされた「形」と緻密な「ディテール」…なのに全体は静かにして優しさに包まれている

ピーター・ズントー



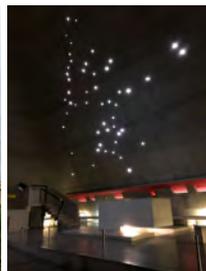
ルツイ邸：ズントー設計で施主がセルフビルド

ローマ遺跡シェルター

聖ベネディクト教会

ズントーの建築：誰もその建築に特別な関心をもたないが、その場所にその建物がないと想像することはできない。時間が経つにつれ、徐々にごく自然にある場所の形態と歴史の一部になってゆくような建物を設計したい、と私は強く願ひ続けてきた。(建築と都市1998年2月臨時増刊より)

ル・コルビュジェ



ユニテダピタシオンの外観と中廊下 <フェルミニ> サンビエール教会の外観と中



ラトゥーレット修道院の外からと中庭から

モダニズムだけを観ると、パラディオ〜スカルパ〜ズントーをみてからのコルヴィジェは違って見える。どう違っているのか…モダニズムだからこそ…。



パウロ・クレ-センター

レンゾ・ピアノ



ペローナの夜はピンクにライトアップされたARINAを眺めながらカフェでフォアグラ・ロッシ-ニの贅沢。



ペローナの昼は中華を探したが、12時開店で諦めました。エルベ広場前のカフェで定番のピザ。でかいだけ。



2度目のザンクトガレン。前に行ったレストランは月曜で休み。フォンデュの有名店でクラシックフォンデュを。



大好きな街シュタム・アム・ラインの☆☆☆ホテルで魚料理。これが臭みもなく、大きさ、味ともに絶品。実はこのホテル、前に一人で来た時に宿泊。客は私が唯一人で、恐怖の体験を…



美食の街リヨンといえばポール・ボキューズ。その姉妹店LE NORDで懇親会。個室を借り切って、エスカルゴ、リヨン風サラダ、ラム肩肉のコンフィ、チーズ、デザートフルコースは贅沢の極



ザハ・ハディド設計のタワー (左) と集合住宅 (右) <ミラノ> ドウオーモ (左) とガレリア (右)



コンフランス地区再開発



旧市街

新建築×リノベ

ミラノとリヨンで再開発地区を視察した。ミラノではザハ・ハディド、リベスキンド、磯崎新らの大物が、機能より形を前面に出して印象的。リヨンのコンフランス地区は隈研吾やMVRDVらが省エネを旗頭にデザインを競う。でも競っているのは隣同士の建築で、世界中で同じような開発があり、幾つもみていると新鮮さを感じない。今でこそ面白いが、50年後、100年後には新古ビルになってしまうのでは。その逆にミラノのドウオーモやガラリアのように、権力者が贅を尽くした古典建築は時が過ぎるほどに価値を高め、リヨンの庶民が住んだ旧市街はリノベを繰り返していつまでもその姿を留め、歴史博物館のような面白さで、この先も永遠に魅力を失いことがないのだろう…



ザンクトガレンの修道院大聖堂 (上) と図書館 (下、ポスターを撮ったもの)。どちらも圧巻の美しさ。



フェルミニの家並み。なんの変哲もない素朴な赤い切妻の屋根と白いモルタルの壁。緑の中にゆったりと取まっている家並みは日本にはない豊かさ。外観より家並み。その方がRichに見える。



スイスの野山が美しいのは循環がみれるから。草原で家畜が育ち、森の木で家づくり、燃料にする。人間が生活する上での「量と時間」が見事にバランスした循環が風景をつくる。そこにある家は風景を美しく引き立てる役を果たしている。



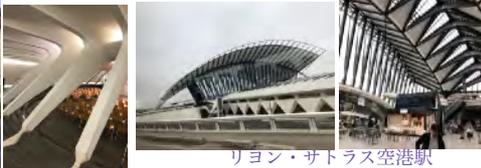
スイスの山岳地帯で、外気温を表示するバスの温度計は、トンネルに入る前が0°Cだったのに、トンネルの中に入るとグングン上がって15°Cになった。地熱の凄さを実感。



ミラノの、垂直の森と呼ばれる革新的な高層住宅プロジェクト。設計はステファノ・ボエリ・アルキテッティ。ベランダからオリーブなどの樹木がワサワサと生い茂っている。エコ評価のLEEDゴールド認証とか。でも、その翌日にスイスに行ってみると、こうしたエコデザインが都会の中での「エコあがき」にみえてくる。



サンチャゴ・デ・カラトラバ



リヨン・サトラス空港駅

ザンクトガレン・ファルツケラーギャラリーの開閉式出入口と内部



ヴェニス 街中がごちゃごちゃしているが運河から観る街並は素晴らしい

ヴェニス×リヨン



リヨン 中央のつぼな鉛筆ビルが醜い。でもこれが今夜の宿だった